

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02737

研究課題名(和文) 19C日本語研究資料が記した標準日本語の基礎的調査と研究

研究課題名(英文) A Basic Survey and Research on 19C Standard Japanese as Described by Japanese Language Research Resource Materials

研究代表者

木村 一 (Kimura, Hajime)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：90318303

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の変遷において重要な時期の一つとして、江戸期から明治期があげられる。そこで、国内外で作成された日本語研究資料(文法書・辞書・テキストなど)を用いて、日本語がどのように移り変わってきたのかについて調査、考察を行った。特に、標準日本語というものがどのように形づくられ現代に引き継がれていったのか(また引き継がれなかったのか)、既存の研究の中心軸となっている資料群から距離を置き、上記の日本語研究資料を対象として進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代語に通ずる19Cの日本語の実態はまだ解明の余地がある。それは、これまでの研究成果から資する事柄はきわめて大きいのであるが、未調査の資料等も多数存在するためである。そこで、19Cの日本語研究資料からことばの常用性をはかり得ると考え、各々の共通部分を日本語の標準の指標ととらえ、外国人の日本語研究資料から日本語を逆照射し、19Cの標準日本語の再構築を試みた。俯瞰的に諸資料の相関関係を明らかにし、実証的に19Cの日本語の世界的規模での展開を解明することで、現代語への道程を導き出すことができるものと考えている。

研究成果の概要(英文)： One of the most important periods in the transition of the Japanese language is the period between the Edo (1603-1868) and Meiji (1868-1912) eras. Hence, this survey and research examined how the Japanese language has changed using Japanese language research resource materials (e.g., grammar books, dictionaries, and texts) prepared both within Japan and overseas. In particular, an examination of how the standard Japanese language was formed and transmitted or not to the present generation was conducted using the aforementioned Japanese language research materials as the subject material, separate from the materials central to existing research.

研究分野：日本語学

キーワード：辞書 文法書 会話書 ローマ字 漢字表記 文体 ミッション 印刷・出版

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

19Cの日本語研究資料(文法書・辞書・テキストなど)を考える上で、当然、個別的な資料を丹念に精査していくことは継続すべき最も重要な取り組みである。一方、俯瞰的に個々に異なる19Cの日本語研究資料における、日本語に対する共通するとらえ方、また扱いといったものを導き出すことで、諸説を補完、補強し、修正を行うことができる。時に当時の日本語を解釈する際の突破口となり得る。

また、19Cの日本語研究資料においては、<国内(日本)での取り組み>、<海外(アジア地域)での取り組み>、<海外(ヨーロッパ地域)での取り組み>に分けてとらえる必要がある。

<国内(日本での取り組み)>

幕末期の日本ミッションの一環として、最も重要な事項の一つに宣教師の日本語習得という問題が挙げられる。1858年の日米修好通商条約締結に基づく外国人の来日が活発化するのは1859年以降である。伝道を見据えながら、神奈川・横浜の地にはJ. C. ヘボン、S. R. ブラウンが、長崎にはC. M. ウィリアムズ、J. リギンズ、G. H. F. フルベッキが、それぞれに極初期の1859年来日し、未刊も含めて日本語に関する辞書、会話書、文法書をまとめている。

<海外(アジア地域)での取り組み>

しかしながら、19Cにも日本語研究資料の作成の試みは、日米修好通商条約以前にすでに国外でなされていた。例えば、アジア地域では、バタヴィアで、P. F. B. von. シーボルトによる*Epitome Linguae Japonicae*(『日本語要略』)(1826)や、W. H. メドハースト編*English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*(『英和・和英語彙』)(1830)が刊行されている。

もちろん、日本語学に直接、間接に関わるということでは、先行する日本のキリシタン資料や中国のイエズス会の資料(漢訳洋書や英華辞典など)も含めなければならない。一方、諸言語として視野を広げると、その系譜は、伝道団体によって、中東、アフリカ、インド、東南アジア、中国などで、19C前半に様々な取り組みがなされている。

<海外(ヨーロッパ地域)での取り組み>

あわせて留意しなければならないのが、日本での取り組みに一步先んじているフランスの日本語研究である。M. C. ランドレスによるI. ロドリゲスの翻訳文典(1825)、L. ロニーの日本語入門書(1854)、L. パジェスによるD. クルティウスの翻訳文典(1861)と『日葡辞書』のフランス語版『日仏辞書』(1862-68)が著されている。日本語研究初期段階において、自国語への翻訳を行っていたことが確認できる。このことは、この時期におけるキリシタン宣教師や、オランダ人の日本語研究が先行していたことを証している。

外国人による日本語研究資料について、国内だけでとらえると、キリシタン資料に見られる16C後半から17C前半の連続性、その後の断絶、そして19C後半からの展開を検討することとなる。

しかし、国外に目を向けてみるとその営為は継続して行われている。当然、個別的な要因があるのであるが、条約締結やブームといった時代、それにとまなう地域によって行われていることを立体的に俯瞰的に把握し考察する必要がある。また、根源にある宣教や伝道という大きなエネルギーの究明は先行研究で積極的になされていない。

日本語に限定しても、キリシタン資料以来、本格的に日本語研究資料が刊行されることとなる。ただ、その刊行は、アジア地域ひいては世界的な規模における広がりを含まなければその位置づけを確定することはできない。それは、19Cの日本語研究資料は、直接にも間接にも影響しあって、その内容は改善(時には改悪)されつつも、広がりや深さを生み出してきていることによる。

様々な時間的事象と空間的事象を組み合わせることで得られた結果により、19Cの標準日本語の実態を解明することは意義のあるものと考えられる。

2. 研究の目的

19Cのヨーロッパとアジアでも、早くは、M. C. ランドレス、P. F. B. von. シーボルト、W. H. メドハーストはじめ、外国人によって様々な日本語研究資料が著されている。本研究では、19Cの日本語研究資料からことばの常用性をはかり得ると考え、各々の共通部分を日本語の標準の指標ととらえ、外国人の日本語研究資料から日本語を逆照射し、19Cの標準日本語の再構築を試みる。

それは、江戸期から明治期にかけての標準日本語の成立と展開を日本人による資料群から探ることには、各資料の趣旨や性質、そして対象の異なりなどから、一元化しがたく不明瞭になる面がある。一方、日本語の解析という立場と、実際の日本語の使用の必要性から編まれた日本語研究資料を中心に据えることで、19Cの標準日本語を導き出せる可能性があると考えられる。

ことばの常用性については、場面や文体といったことが大きく関わるが、分かりやすく伝えることも、難解にすることも、それぞれに必要性がある。そのために日本語研究資料は当時の日本語の実態を映し出しているとも言えるのであるが、収録されていることばの常用性は一律ではないために、すべてが同様に用いられていたと考えすることはできない。

例えば、漢語をはじめとしたことばの常用性というのは、日本語を研究する外国人にとっては見当のつき難い面があったはずである。中でも漢字表記については、近世中国語と日本固有のもの

のとの相違については、意識が払われず、漢語、またそれに伴う漢字表記は、漢字文化圏においてユニバーサルなものであると認識している面がうかがわれる（後に区別が意識される）。このような日本語研究資料での扱いから、当時の状況を知る手がかりが得られるのではないかと考えている。

また、日本語研究資料には欠くことのできない日本語の表記に用いられたローマ字綴りの多様性から一本化への過程、さらには資料相互の影響関係を見出すことにも取り組む。あわせて、国内外での刊行の経緯を個々の資料と対峙させながら進めることによって、俯瞰的に諸資料の相関関係を明らかにし、実証的に19Cの日本語の世界的規模での展開を解明する。

様々な日本語研究資料における個々の基準軸に配慮しながら諸資料との比較検証を行うことで、19Cの標準日本語の実態を現代日本語への展開を考慮しながら追究することとしたい。

3. 研究の方法

19Cに外国人によって著された日本語研究資料は様々である。それぞれ、当時の日本語の実態を映し出している面が多くある。そこで、個々に常用とする日本語を検証することを試み、その上で19Cの日本語の標準がいかなるものであったのかを日本語研究資料から導き出す。

まず、本研究では、様々に語られる19Cの標準的な日本語の解明のために、外国人による日本語研究資料からその実態を導き出すことを試みる。個々の日本語研究資料がどのような日本語を中心にとらえ、そしていかなる使用者に向けているのかといったことが重要である。そのためには、中心軸をとらえるための指標を検討する必要がある。そこで、収録されることばの常用性、文体、また漢字表記など、標準となるべき中心軸となる日本語の指標の整備を行った。並行して、国内外の所蔵機関に赴いて調査を行った。

そして、その指標をもとに、著者の所在地、刊行地をはじめ、相互の影響関係といったことを加味しつつ、実際に文献を実見し、調査・研究を行う。また、非アルファベット言語である日本語のローマ字綴りについても、著者の母語との関わりを含めながら進めた。

あわせて、どの地域で刊行されたのかといったことも、使用者層を検討するにあたり、欠くことができないために、所蔵機関に赴き、原資料を確認した。また、書名だけが知られながらも、国外に所蔵されているようなものもあり、各年度、所蔵機関を変更しながら調査を試みた。

様々な日本語研究資料における個々の基準軸に配慮しながら、諸資料との比較検証を行うことで19Cの標準日本語の実態を追究することを目指した。文法・語彙・表記・音韻などの諸面から、汽水域にあたる当代の日本語を把握することで、前代からの継続的な面、また次代への萌芽といったことを立体的に考察が可能であると考えたためである。

4. 研究成果

個々の日本語研究資料と、全体の影響関係を日本語という面から整理するため、次の観点から調査・研究を行った。

<ことばの常用性>

日本語を研究する外国人にとって、大きくは地域・時代、個別的には性・年齢・集団、また同一の人物であっても場面・文体によることばの違いは見当が付きがたいことであったと考えられる。例えば、用例や例文に用いられる日本語の文体や表記などから、その特徴を見出す手がかりになる。それらの異なりから、資料間の影響関係を知ることができる。また、広く共通する部分も存在し得る。重なる部分と重ならない部分から、彼らの目を通した標準日本語とはどのようなものであったかを導き出すことができる。

<日本語ローマ字表記の関係>

日本語をローマ字で綴るにあたり、アメリカ系来日宣教師は来華宣教師 S. W. ウィリアムズにならっている。そして、その根源は C. R. レプシウスの非英語圏の諸言語をアルファベットで示すことを試みたうちのの一つによっている。S. W. ウィリアムズの綴りの提唱前後のローマ字綴りを諸資料で比較対照を行うことで、ヘボン式ローマ字の祖形の展開を確認することができる。

<印刷技術・出版社・刊行地の実態>

同一書ながら複数の刊行地を持つ資料も多くある。需要を示すと同時に、これらの資料が実際に、どのような使用者を想定して編まれたものなのかを知り得ることができるはずである。特に、印刷技術の状況、諸外国の複数出版社の協同といったつながりをライデンとハーグ、ロンドン、パリを中心に見出すことができると考えている。そのためには、現在の所蔵状況、また同一資料間の異同の確認を行うため実資料の調査を行う。

具体的な調査・作業・研究また見込みなどについては、次のとおりである。

- ・ 1870年代の独和辞書と和独辞書の序文について翻訳を行い、さらに各辞書の代表的な見出し語の訳語比較を試みた。主に訳語との関わりとなるが、対象とした辞書間だけでも大きな変化があったため、それ以後のドイツ語の影響力による訳語の展開を検討していく必要がある。また、先行する日本語研究資料からの関わりについても整理を行った。あわせて、印刷、出版に加え、使用される字体、分量（収録語数・頁数など）、形態・内容（見出し語・品詞表

示・語義・用例・類義語など), 構成・体裁(段組・大きさ・巻数・装丁など)といったことも対象とした。

- ・ 啓蒙思想書という観点に立ち, 特に中村正直による『西国立志編』(1870-1871)を用いて検討を行った。文明化開化期の日本語の資料として, 多くの読者を持ち, 後世に影響を与えていることをより深く検討する必要があると考えてのことである。
- ・ 代表的な 19C の文語文の資料を中心に用いることで, 漢文訓読文と和文といったものへの当時の意識, また近現代的な文体への展開などについて考察を加えた。
- ・ 現代の「自然」に該当する外国語と, それに付された日本語の訳語について, 16C から 19C の対訳辞書を中心に, 先行研究のとらえ方について疑問となる点などを含め検討を行った。それぞれの文献資料における記述から相互の関連性と言ったことも見出すことができるものと考えてのことである。
- ・ キリシタンから現代への日本語のローマ字転写の変遷から, 標準日本語の音価について史的観点から整理を行った。母語の影響による異なりと, 概念による異なりと, それぞれの事由を体系的にとらえなおすことを試みた。
- ・ 国内外に点在する日本語研究資料は, それぞれに背景を持っている。それは, 時代, 人物が深く関与して, 現在の状況を形成していることによる。そして, これらの研究は, 先学によって着実に行われてきている。しかしながら, 近年まで, インターネットやデジタルカメラといった電子デバイスすら存在しない状況での資料の所蔵確認, 閲覧, 書誌情報の記載, データ保管は, とても困難なものであったと推察される。そこで, 実地におもむき, 資料や担当者と対面して閲覧することで, 見込み違いや誤りをあらためることができた。時間や労力をかけての実地踏査は不可欠であることを再認識する機会ともなった。収集した資料については, 継続して解析を行いながら, 資料の公開, また研究成果を発表していく予定である。
- ・ 幕末・明治期の辞書のデータベースを構築しつつある。データに関しての整理, 検討を加えながら, 自身の研究に寄与するように進めている。研究上, 重要な資料については, 全データの撮影およびアーカイブ化, さらにフルテキスト化を並行して行った。なお, 日本のみならず, 継続して海外の資料も対象とした。特に, 紙質, 印刷状態などについて原資料を実見する機会となる調査は欠くことができない。それは, 保管状態や一片の挟み込まれたメモなどが有用なヒントになり得ることもあるためである。デジタル化資料では超えられない側面が多分にあるので, 原資料の保存先への調査を積極的に行わなければならない。また, さまざまな日本語研究資料の電子化は実際の図版ともども急務であり, 特に資料の劣化と正面から向き合う必要があることを実感している。
- ・ 日本人のとらえた外国語と, 外国人がとらえた日本語, それぞれの軸足の違いを考慮しながら, オランダ語, 英語, ドイツ語, フランス語, ロシア語に関わる対訳辞書について, 整理し, 検討を加えた。特に, 蘭学から英学へのシフトとは密接に関わりを持ちながら, 蘭学と英学の成果をベースとして諸対訳辞書が編まれている。そして, 基底にはオランダ語の蓄積が大きく影響していることについて全体的に再確認を行った。また, 海外で編まれた語彙集も大きな影響を与えている。
- ・ 日本語研究資料の位置づけを考える際に, 国内での日本語の評価というものに視点が及びがちであるが, そこにいかなる時代, また人が関与したのか, 俯瞰的な視点で解釈を行うことに留意した。特に, 印刷技術, 交通, 条約, 制度といったものが, 標準日本語の流布に大きな影響力をもたらしている。
- ・ 英和辞書・和英辞書・国語辞書を一体の資料として, 19 世紀の成立と展開を整理しながら言語学的な見地に立ち, 当時の日本語をとらえ直すということ進めた。この点に関しては, 相互の相違はもとより, 根底に流れる共通した「教養」という共通項から整理する必要性を実感している。
- ・ 日本語のローマ字綴りの相違は, 個人によるものなのか, 母語干渉によるものなのか, 一時的な齟齬であるのか, さまざまな事由が考慮される。これらをひとつひとつ紐解いて, おおきな枠組みというものを検討した。解析を行うことで, 語彙などによって相関関係を把握すると同時に, 日本語のローマ字綴りの異なりが指標になると考える。
- ・ 標準日本語の展開については, 地域性といったことを忘れることはできない。実際の出版社, 刊行地の実態ということも国内, 海外(アジア地域とヨーロッパ地域)と検討を行っていくことで, 地域ごとによる標準日本語のありようととらえ方が把握し得ると考える。例えば, 日本の印刷技術が確立されていない 19C 中葉には, 上海に渡り印刷が行われている。これは技術的なレベルの高さを求めたというのが第一の理由である。しかし, そこに橋渡しをした仲介者, さらに例えば九州から, 東京への距離と, 上海への距離といったことも大きく影響している。

以上, 19C の標準日本語の軸を定めるべく, さまざまな日本語研究資料を実見・確認することに努めた。さらに, 日本語研究資料をなし得た人物に関わる資料(例, 書簡, 日記)についても同様である。特に個々の資料の特徴を示す日本語と, 一貫して基底を成している日本語について, 詳細に検討を行った上で, 今後も指標の整備に力を注ぎたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村一	4. 巻
2. 論文標題 『和英大辞典』（1896）の略号表示 - [Chin.]の略号を持つ語と先行辞書との関わり -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史言語学の射程	6. 最初と最後の頁 442-454
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村一	4. 巻 121
2. 論文標題 S. R. ブラウンの二つの会話書 - Prendergast's Mastery System. (1875)を中心として -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立教大学日本文学	6. 最初と最後の頁 495-506
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村一・大野寿子	4. 巻 91
2. 論文標題 明治初期の独和辞書と和独辞書 序文の翻訳と解説を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文学論藻	6. 最初と最後の頁 47-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 19世紀の対訳辞書の継承と展開 - 標準日本語との関わりを含めて -
3. 学会等名 「日本与世界 - 文明的伝播, 互動と発展 - 」 北京大学建校120周年国際学術研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 対訳辞書が国語辞書などに与えた影響 - 引き継がれたものと引き継がれなかったもの -
3. 学会等名 「近代辞書の歩みとこれから - 明治150年の辞書世界 - 」 語彙辞書研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木村一
2. 発表標題 同一見出し内の複数漢字表記について
3. 学会等名 「2019年度 北京外国語大学国際シンポジウム」 漢字文化圏近代語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hajime Kimura
2. 発表標題 A Japanese and English Dictionary (1st edition) published in 1867 by James Curtis Hepburn
3. 学会等名 Translation and Transformation: The Formation of New Concepts in Britain and East Asia A Workshop at University of Oxford China Center
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 沖森卓也・木村一（編集）、安部清哉、加藤大鶴、吉田雅子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 148
3. 書名 日本語の音	

1. 著者名 沖森 卓也 (編集)、木村 一、木村 義之、陳 力衛、山本 真吾	4. 発行年 2017年
2. 出版社 おうふう	5. 総ページ数 159
3. 書名 図説近代日本の辞書	

1. 著者名 編集：野村雅昭・木村義之 執筆：木村一	4. 発行年 2016年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 290(75-97)
3. 書名 わかりやすい日本語	

1. 著者名 監修：中山緑朗・飯田晴巳 編集：沖森卓也・山本真吾・木村義之・木村一 執筆：木村一	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 341(215-246)
3. 書名 品詞別 学校文法講座8 - 古典解釈のための文法 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----